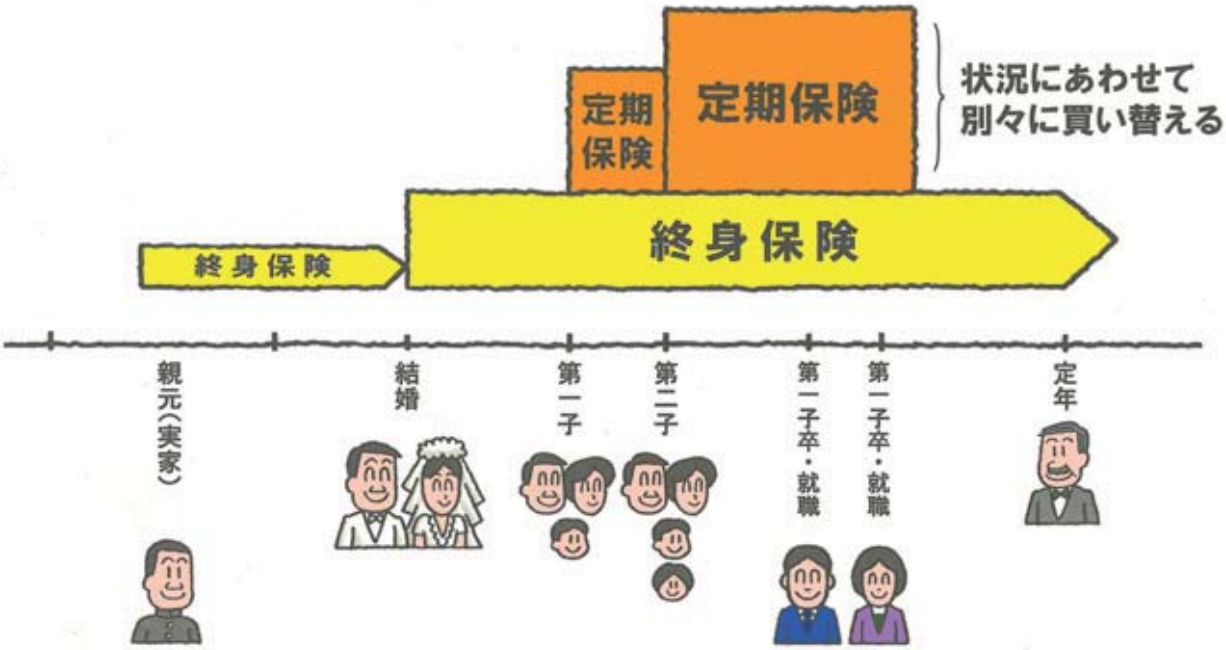
父として「入る」生命保険

1. まず基本となるのは「葬式代ぐらい自分で用意する」ことでしょう。
2. 変化するライフステージに合わせて定期保険を追加する。
3. 寝込んだときの医療費に備える。

父として入る生命保険の基本的な考え方は社長と同じで、どのくらいの責任を背負っているかで異なりますが、「生きて良し」「死んで良し」の状態を作ることは同じです。

父が普通のサラリーマンという場合と中小企業の社長だという場合、または土地所有者だという場合では、その背負っているものが違うので入るべき保険も異なってきます。



普通、男のライフスタイルを考えれば

① 一人身のときは、特に大きな保障もいらない。

② 結婚して子供が生まれれば、それなりに大きな保障が欲しい。

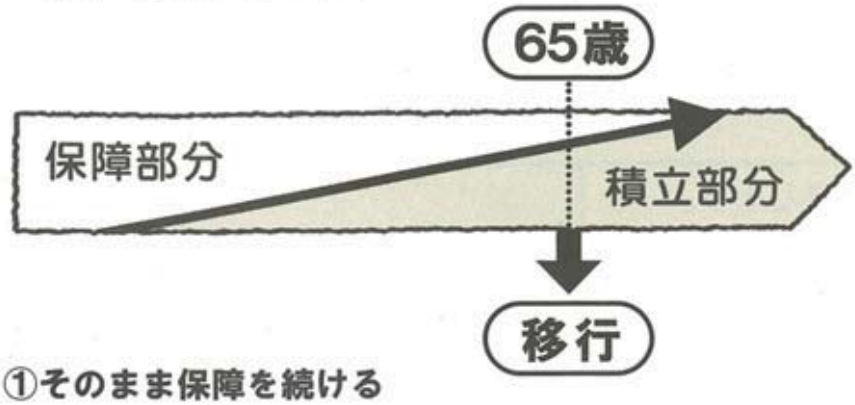
③ 子育てが終わり、また夫婦２人だけになればそんなに大きな保障は要らないけど、葬式代くらいは自分たちの手で何とかしておきたいというのが一般的でしょう。

そこで、一般によく利用されるのが「定期付終身保険」です。簡単に言うと、基本となる終身保険に、定期保険を重ねてパッケージにしたものです。商品の傾向としては、「保険料の負担を小さく」しながら、同時に「保障を大きく作る」ために、小さな終身保険に大きな定期保険を重ねてあるものが多いようです。広く万人のライフスタイルに合わせる工夫なのでしょうが、個人個人のニーズにフィットしにくい形になってしまうものも少なくありません。

ここでは、中小企業の社長であり、一家の主でもある父の場合を考えてみたいと思います。まず、基本となる終身保険と定期保険を分解して、定期保険についてはある程度会社の社長として入らなければいけない保険のほうでカバーし、父としての予算は基本となる終身保険の購入に充てるという方法があります。

終身保険加入の第一義的目的は、確かに葬式代の準備にありますが、大きな終身保険を購入しておけば、一定年齢が来たときにその貯蓄部分の金額を使ってその終身保険契約をそのときの状況にあわせて保障内容を変化させることができます。

●積立部分を手厚くしておけば、様々な選択が派納です。



①そのまま保障を続ける

当初予定したとおり、死ぬまでの保障を残しておく。

②年金保険に移行する

子供たちも成長したし、自分の葬式代くらいの貯金は貯めたので、終身保険を年金保険に移行して自分の豊かな老後のために使う。

③介護保険に移行する

最近、体調が悪く、葬式代よりは自分の介護代のほうが心配だ。こんな場合は、終身保険を介護保険に移行しておき、介護する側の子供の負担を小さくしておく。

④解約してお金に代える

一定年齢が来て、そろそろ子供との同居も考えたい。終身保険を解約して、今の家の建て直し代金に充てる。

基本となる終身保険を大きく購入しておけば、葬式代という当初の目的以外にも、上記のように応用を利かすことが出来る保険です。

終身保険に入るには、若ければ若いほどおトクです。
少し、無理をしてでも入っておけば、楽しいセカンドライフが過ごせます。